

**失敗体験を繰り返してきた利用者の
ストレングスを生かしたナイトケアの試み**
○畠山美樹（看護師） 後藤幸枝（作業療法士）
医療法人耕仁会札幌太田病院 1 階デイナイトケア課

【はじめに】

ナイトケアの利用者（以下 A 氏）が通所を継続する中で「本人の強み」（以下ストレングス）を発揮し、生き生きとした姿が見られるようになった。本人の個性を認め、ストレングスを発揮する場を提供できたことが変化の要因と考えられるため報告する。

【症例】

30 代男性、自閉症スペクトラム障害（ASD）。過去の就労においてコミュニケーション不足により、失敗を繰り返し社会参加できずにいた。

【経過】

通所開始当初、A 氏は発汗し緊張もしていた。そのため、私はナイトケアで A 氏が失敗体験をしないように過保護なほどに気を使い接してきた。心理的安全性が保障されたプログラムの中で A 氏の自発的な発言が増えていった。私が A 氏に成長を伝えたところ「慣れただけです」と正直な返答があった。これに戸惑いを感じ、支援を振り返るきっかけとなった。A 氏はいつも学んでおり、哲学や歴史に関する話題に明るく、論理的に語る力もあるため、周囲から尊敬を受ける場面がみられた。私は A 氏の豊富な知識と論理的思考がストレングスであると気づき、それらを披露する場を提供するために多職種で話し合った。A 氏にはプログラムの中で teacher の役割を担ってもらうことにした。具体的には、様々なプログラムの中で、スタッフから A 氏に歴史や哲学に関するテーマを中心に話題を振り、豊富な知識を披露してもらえるように関わった。A 氏は日常生活の体験談や考えを交えて話すことができるようになった。A 氏が「知識を発表できる場があるのはうれしい」と話す姿が観察され、自己効力感の高まりがうかがえた。

【考察】

私は A 氏に成長を伝えたが、A 氏は成長とは認識していなかった。支援が私自身の安心を優先させるものであり、A 氏がもともと持っていたストレングスに気づけていなかった。私は病棟での勤務が長く、保護的な姿勢が身につけていたが、デイケアでの役割を再考させられた。プログラムの中で student から teacher に役割が変化し、A 氏が豊富な知識と論理的思考を発揮する場を持つことができた。生き生きとした姿が観察されるようになり、A 氏が前向きな気持ちで担うことができる teacher の役割と受容的な場が、ストレングスをより発揮させたと考えられる。

この事例研究を通して、精神科デイケアの看護師にとって重要なのは、本人の主体性に寄り添う支援であると学んだ。支援者の意識よりも、主役は利用者であり、ストレングスを引き出す関わりが重要である。加えて、利用者を student としてみなしてしまいやすいデイケアの枠組みを超え、teacher の役割を担ってもらったことは、新しい支援のあり方を考える一助となった。今後は、社会参加についての思いを伺いながら、A 氏自身が持っているストレングスを共有し、ステップアップを目指したいと考えている。